

放送人の会

二大シンポジウムの成果を見る

その1

「テレビは誰のもの？」

子供・テレビ・Vチップ

11・4、武蔵野公会堂にて

少年の非行事件、凶悪犯罪事件などがおこると、テレビの「性と暴力シートの悪影響」をめぐって、テレビ批判、非難が、活字媒体を中心に盛んに行われる。

アメリカ、カナダ並みに、日本にもVチップ導入すべし、の声は、まだ衰えてはいなかった。郵政省や文部省も、Vチップ研究成果のまとめを、十一月中旬に作り上げると聞くだけに、テレビ制作現場の人間は勿論PTA、批評家、研究者、学生——放送に関心のある人たちと膝つきあわせてVチップ導入を入り口に、つまりは放送番組とは誰のものであるべきか、放送の果たすべき役割とは何か、の問題を幅広く検証するシンポジウムであった。

パネラーは研究者の宮台真司・鈴木みどり、キャスター蟹瀬誠一、PTA全国協議会の浅井修一郎の各氏に、会から堀川とんこう、野崎茂両幹事が加わった。PR面やや遅れをとったきらいがあり八〇名を切る集客ではあったが、充実した熱心な討論が繰り広げられた。(次頁参照)

幸い、Vチップ制は見送り、との結論が出た。つとに問題点を突いた本企画が、或いは大きく寄与したかも知れない。各社、責任ある自浄を、注意深く待とう。

その2

Inter BEE '98

国際イベントの一翼

「二一世紀、放送はどこへゆく？」

文化としての放送を創り手は

11・12、幕張メッセにて

多チャンネル時代をそれぞれの得意分野で番組と共に生き抜く意欲と模索について、第十回の今回にして初めて披露される、ソフト制作現場人のシンポジウムは、「放送人の会」と「日本エレクトロニクスショー協会」共催で、朝から千葉幕張メッセという遠方が会場だったが、百七十名余の聴衆が集まり、それぞれに理念と方法論を持つ優れた放送人の多彩なパネラーの熱弁に聞き入った。

発言順に要約すれば、まず「不易と流行」と題して自分史から説きおこし、流行を追う若手に苦言を呈して自らは電波の公共性からしても不易のドラマを作る覚悟を述べたドラマ演出及び制作の大山勝美氏。

「テレビニュースの提供するリアルなもの」とアンリアルなもの」と題し、テレビニュースが提示するすべてを、無批判に受け容れる「受け手」のレベルに問題あり、と鋭く指摘、アメリカ映画「トルーマン・ショウ」

また若き日の木村栄文会員演出・森崎和江氏構成の傑作ドキュ・ドラマ「まっくら」のワンシーンを例に挙げて、嘘乃至は解釈、演出の切り取った部分だけが伝わる時、真実に

より良く迫っているとしても、事実と再現とは混同されてはならない、という鉄則を「受け手」に厳しく突きつける、つまりは「神様」の視聴者を論じる異色のタブー肉迫ぶりを展開した、ニュース23のデスク(かつてのモスクワ支局長)金平茂紀氏。

「制作会社の作り手とデジタル時代」と題し、ドキュメンタリー制作に關しては今最も元気の良い番組制作プロダクションの社長として、デジタル時代にも何を表現したいか、創り手の志が肝要と語る橋本佳子氏。

「多チャンネル化に向けたバラエティ番組の方向性」と題して、お笑いブームの仕掛人である番組のドンと自他ともに許す円熱プロデューサーの眼から来世紀を予測すると、天才の出現はもはや無いかもしれぬと、笑いの質、笑わせ方の変質をもついた澤田隆治氏。そして「マスメディアから、個人に届くメディアア」と題して、「インターネット法廷」や

世界各地の子供たちの柔軟な眼に期待してデジタルビデオカメラを貸し、持ち寄った映像を集めてグローバルな問題提起に挑む「エコ・キッズ」等をスクリーンに呼び起こして、インターネットタイプな未来への道の一つを示唆した、生命や医療に関わる特集等を制作もしたアナウンサーから解説委員に変身の迫田朋子氏(司会も兼ねる)。

放送人の会会員として、超多忙のなか、参加して下さったパネラーの皆様と会場にお出掛け頂いた方々に、深甚の感謝を表明します。

幸い、技術系聴衆の反響も良好とか、来年に繋がる成果を得たという感触を報告したい。

寸言の窓

放送人の会会長 川口幹夫

☆ 嗚呼 Vチップ

Vという字には色んな意味がある。一番有名なのはVICTORY、「サインはV」という番組もあった。VI、VII、VIIIとくるとこれは強かった日の巨人の連勝、そんなイメージの強かったVの字がこの頃トントン形なものである。

VチップのVはVIOLENCEのVだとか! 何ということ、Vの字が禁止の意味に使われる。これは恥ずかしい。

せめてVチップの問題はすべて放送界の自主的な討論でその可否、もしくはやり方をきめさせて貰いたい。そして決めた以上はよそから非難など絶対うけない、安心して任されるようになりたい。それが我々の誇りだ。

☆ 三百チャンネルの恐怖

デジタルだ、多チャンネルだ、という声とともにやがて百チャンネル、いや三百チャンネル時代が到来するといわれる。三百チャンネル、いよいよ多チャンネル花ざかり声のうらに、「そんなにあってどうするの」という声も聞こえる。現在のテレビ界だと、わたしにもやはり三百チャンネルは恐怖である。それだけ多様な多彩なソフトがとてつもないと思ふからだ。恐怖を歓喜に変えたい。いや変えなければならぬ。そのためには思い切って、現在我々にしみついている固定観念を変えてゆこう。

一、良い番組で高視聴率を上げよう。二、子どもに悪い番組は絶対に作らない。三、たまには冒険をしてみよう。

新たに支持会員制

若手の参加に期待

若手会員に参加してもらいたい

——という気持は前々からあった。とくにシルバード世代の間では、若い人たちに入ってもらわないと、会を作った意味の半分は失われるとまで言う人が多い。川口幹夫会長の若い人に門戸を開くべきだという再三の発言が、そうした意向を加速した。幹事会で議論を重ねた末、次のように決め、会長に報告、了承を得た。

名称 支持会員

条件

この会の主旨に賛同し、本会の事業に協力する意思のある人。つまり、番組制作や著作にまだあまり実績のない方々を「支持会員」として受け容れる(推薦者はいらない)。

会費

年会費 五〇〇〇円。
(一般会員は一万円だが支持会員は半額。入会金不要)

サービス

会報及びイベント開催通知を送る。また、意見・提案を受け、会として事業化を図るとともに、会の企画する事業やイベントへの積極的参加を歓迎する。

新しく支持会員制を発足させることになったので、これまでにアプローチのあった方がたに入会申込書を送った。

*周囲の若い人たちに会員諸氏から働きかけてくだされば幸いです。

「放送人の証言」スタートへ

～画期的な番組は 誰によって
いかにして作られたか～

放送史に残るイノベティブな番組を生み出した人びとの当事者としての「証言」を映像で記録しておく——事業計画 いよいよ本格化

Vチップ・シンポ 高レベルの議論を展開

テレビは誰のもの？ 子供・テレビ・Vチップ

11月4日、午後六時半。わが放送人の会主催、初のシンポが始まった。三十分もたたないうちにパネルの中は「乱取り」に移行。あるときは激しく対立し、あるときはコンセンサスで盛り上がり、あるときは大胆な発言に緊張が走った。講演が直列するようなシンポが多いので、司会の小生は内心、けっこう心配していた。そんな心配をふっ飛ばす勢いだった。

最初の対立点は、「親対子」の関係。子供を指導する責任のある親にとって、Vチップは有用情報。したがって賛成。これに対して子供の権利、Vチップをバイパスする子供の知恵、実効性の低さ、「見せない」と決めるのは親の権限過剰行使、といった理由で反対。

(一) これはどうやら、親が子供に対して持つ権利義務論という、今どき揺らいでいる問題の、極めて具体的な応用問題のように感じられた。角度を変えれば「子育て」に臨む親のスタイルの違いであろう。子ども指導に自信のある人(親)は、チップなんかいらぬ。忙しいとか、どう指導したらいいのかわからない人(親)は、薬にもするが思いで、是非チップを導入してもらいたい、と

いうところだろうか。子供の養育指導に対して親はどういうスタンスをとるか、という点で賛否が分かれるらしい。そうだとすると、親子論・家族論・家庭論の立場からの、あるいは心理学からの突っこんだ議論が必要になるのではなからうか。Vチップは意外と根の深いテーマのようである。

(二) 「悪影響」という言葉をこんなに軽く使っているのだろうかと思ふことが、ぼくの場合、しばしばあった。パネルではこの「悪影響」をちょっと突き放したかたちの議論になった。何歳ぐらいを中心に悪影響と判断するかと蟹瀬誠一さんは問いをたて、十二歳あたりでどうかという。同じ番組でも子どもの場合、年齢によって受ける影響は異なるだろうし、さらには一人で見ると家族・友だちといっしょにみるかで、また影響は違ってくる。悪影響を一概にいうことの難しさが指摘された。少年の非行や犯罪事件が起きると、テレビの影響と短絡する意見がでてくるが、これは「きっかけ要因」を重くみるからだ、宮台真司さん。にもかかわらず、もっぱらテレビのせいだとする風潮が続いている。実証研究の領域では、攻撃的傾向

の強い子どもが暴力番組を見て攻撃的行動に出ることは認められる、という程度のことしかいえないようだ。

(三) 浅井修一朗さんが、九割近くの親が「悪影響あり」と思っているという調査データを示したことに、反論はなかった。というのも、ほかの四人のパネラーが、Vチップを突きつけられても仕方がないくらい、節度をこえた性・暴力表現がおこなわれていると感じていたからだろう。鈴木みどりさんは局が自分でつくった放送基準や基本綱領を確実に守っていれば、こんなことにならなかつたらうと指摘。ぼくのメモをみると、局の二枚舌とか、ざまアみるの気持とか、他のパネラーの激しい言葉が残っている。

掘川とんこうさんは制作者の長い経験を踏まえて、基準や綱領は視聴者との契約であり約束なのだから守らなければならぬとしたあと、芸能の立場を説明した。シェークスピアを持ち出すまでもなく、悪人や非行少年を取り上げる芸能が多いのは、そこに人間のエネルギー源をさぐりあてるカギがあるからだ、と。そして局はいま、自己像を見失っているのではないかと指摘した。自己像をハッキリさせることで、視聴者との信頼関係を回復できるだろう。

追記

幹事・野崎 茂

このシンポについての紹介・報告が民放連機関紙『民間放送』十一月十三日号、二十三日号に掲載された。CS朝日ニュースターが扱ってくれた。その他『月刊民放』九九年二月号にシンポ記録掲載検討中。

放送人の会とは——

NHK、民放、プロダクションの枠をこえて、個人として参加し相互に刺激・啓発しあい、「放送」のことを考え、つねに社会にむかって、開かれた集団として、超世代、超組織、超地域に、発言し活動して行こうという会です。

1997年12月発足

会員220名

会長 川口 幹夫

会費未納のメンバーにお願い

放送人の会は「研究シリーズ・放送人の世界」第一回(6月7月)とVチップ・シンポジウム、インタービー・シンポジウム(ともに11月)を開催し、だんだん軌道にのってききました。どんなことをする会なのか、との質問に答えるだけの実績ができてきたわけです。

事業活動をやれば当然おカネがかかります。会員諸兄弟の拠出金、入会費、年会費だけで運用されている当会は、収入に見合う計画を立ててやっていますが、率直に言って会費未納の人数が予想を上回る状況です。この際、未納の会員には別途ご案内をさせていただきます。是非会費等の納入をお願いします。

世話人会の開催について

放送人の会発足以来一年間の活動をふり返り、かつ新しい年の活動計画についてご相談したいと思ひます。新年の交歓会をかねまして、ぜひご出席ください。

日時 一二年一月中旬(別添(案内)場所 千代田放送会館内
会費 三〇〇〇円

議題

- ①平成一〇年度活動報告
- ②会計報告(収支報告)
- ③平成一一年度活動計画について
- ④「放送人の証言」事業計画／シンポジウム開催、など
- ⑤幹事の改選について
- ⑥会費未納問題